

---

## 協会活動と建設業界での 40年間の思い出

---



(株)安藤・間 建設本部 本部長付 館岡潤仁

一般社団法人 日本建設機械施工協会が協会加入各社の皆様と共に創立70周年を迎えることができ、心より喜ばしく思います。

昭和24年の創立となると、戦後の機械化施工の草分けと言われた電源開発：佐久間ダムの着工より5年早く、会社の先輩諸氏からは沖縄や横田の駐留米軍の基地整備で重機施工が行われていた頃のように聞きました。

私の入社は昭和54年ですから、協会創立から30年

が過ぎ、発電用ダム建設の時代は峠を超え火力発電所や原子力発電所の建設が盛んになっていたころです。そして、さらに40年が過ぎた現在では、国土強靱化がインフラ整備の大きな柱になって来ています。

私の協会活動の最初の印象は、平成16年の「新潟県中越地震」の調査団での活動でした。多くの皆さんには平成7年の「阪神淡路大震災」が近年の震災記憶として残っていると思いますが、当時、私は海外工事に携わっており、帰国後に報道・通信社まで甚大な被

害を受けると海外には災害情報は殆ど伝わらなくなるものだなと感じた思いがあります。

この新潟県中越地震では、自社が「山古志村芋川河道閉塞」の緊急復旧に携わっていたこともあり、内陸地震での「山ごと滑る」様な地すべり被害の大きさに驚くと共に、河川の上・中流域での閉塞・決壊の危険性に気づかされました。自社の復旧工事では、機電部門は河道閉塞部の排水を受け持ちましたが、初期の頃は毎日の降雨量と水位変動を一喜一憂で見守る状況が続き、発電機・ポンプ・排水経路の確保が完了して排水が順調になるまで「越流・決壊」が頭から離れない日々が続きました。

震災は、その後も中越沖地震、岩手・宮城内陸地震、東日本大震災、熊本地震、北海道胆振東部地震と続きそれぞれの復旧・復興工事に携わってきました。

特に、東日本大震災に伴う放射性物質漏洩事故では試験除染時に現地調査に入り、信号機は普通に点灯しているのに街に歩く人の姿はまったく無く、時々白いタイベックスーツ姿の除染作業者が数人ずつ姿を見せるといった「核戦争後を題材とした映画の風景」を彷彿とさせる様相に衝撃を受けました。

これら以外にも台風や集中豪雨災害の復旧にも携わりましたが、今感じることは「自然の営み」は人間の考える時間スパンやスケールとは桁が違うということです。

一方、人の営みである建設工事においては、土木構造物の大型化は世界的に一段落している様に思えますが、建築の高さ競争はまさに最盛期です。20世紀は

1931年のエンパイア・ステート・ビルの381m以降、アメリカの超高層建築時代の観がありましたが、最終盤の1998年に私も工事に携わったペトロナスタウンタワー（マレーシア）の竣工で452mとなりました。約70年間で70mの成長でした。21世紀にはいつてからは中国とアラブ地域で首位争いが激化し、現在の世界一はブルジュハリファ（ドバイ）で828m、以下600m級のビルが中国やサウジアラビアで並んでおり、わずか20年足らずで376mも背が伸び、さらに建設中ビルでは1000mを超える規模で工事が進んでいます。

私には現在20位となったペトロナスタウンタワーでさえ多くのエレベータのために共用フロア面積が取られ、稼働フロア面積が少ない使い勝手があまり良くないビルに思えたのですが、天を目指した現代の「バベルの塔」の高さ競争に終息の気配はありません。

昔、映画で観たキングコングは完成したばかりのエンパイア・ステート・ビルに登っていました。次の映画では9.11テロで倒壊したワールドトレードセンタービル（415m）を制覇しました。今後、協会創立80周年までにキングコングは果たしてどこのビルに挑戦するのでしょうか？？ 世界一を目指すなら次回は海外遠征することになりそうですが、1000mを超すビルとなれば今までの2倍以上の高さになりますから、しっかり筋トレしておかないとキングコングといえども途中で息切れしてしまうかも知れませんが。

JICMA